

第7回

手術は成功,しかし……
病院が大好きなさきよさんの「安心の最期」

前号のデータでは、病院で最後の日々を過ごす人が約96万人(73.9%)で、自宅での約17万人(13%)の5倍以上です。これからは病院も自宅も選べるように進むにしても、病院がたくさんの死を引き受けていくことは、変わらないでしょう。

「お医者様と検査が大好き」なさきよさん、91歳で手術の後……。人生終わりの日々の物語です。

*

アレルギーや自律神経失調などあちこち具合が悪く、なじみの医院にすぐ電話するし駆け込みます。夫は「病気の間屋さん」とあだ名をつけ、娘は「病院に行くだけでよくなってしまふのね」とからかっていました。

そんなさきよさんが、最後に入院したのは、大腿骨を骨折して救急車で搬送でした。「痛い痛い」と大騒ぎ。

手術の話が出たとき、娘は「お母さんどうする?」「手術、我慢できる?してもらおう?」と確認し、さきよさんが希望して、手術は無事に終了しました。整形外科医は「手術は大成功、よかった、高齢なのに出血がなくて。2週間で退院できます」と。

ほっとした娘がいったん家に帰って、夕方病室に戻った時、さきよさんの様子は一変していました。顔が大きくむくみ、口から泡を吹いていたのです。驚く娘に、医師は「ああ、麻酔が効いてるんですね。明日になれば治りますよ」とあっさり一言告げました。

ところが、翌日になっても、1週間たっても、治らなかったのです。説明は「麻酔のキレが悪かったのでしょうか」というだけでした。確かにその危険も含んで手術承諾書にサインしたのですが……。

さきよさんはもう、話すことも飲み込むこともできなくなり、「食事がとれないので、胃ろうに」と決断を迫られました。とりあえず胃ろうにし、ケア付きホームの自分の部屋に退院できたとき、さきよ

さんはうれしそうなほっとした表情になったように、娘には見えました。50日後、意識混濁のまま、このホームで臨終を迎えました。

*

思いがけない経緯で亡くなったとき、遺族はどんな思いでしょう。さきよさんの娘に聞きました。

「あの手術が原因で母は亡くなったのか? 手術を大成功と言った整形外科医も、麻酔は別の医師が担当なので、分からないんじゃないかと思います」

「こういう麻酔のトラブルがあることを、後から聞きました。知人が同じ頃同じ手術をしたとき全身麻酔

でなく、局所麻酔にしてもらったそうです。それを知っていれば『局所麻酔にしてください』って言えたかもしれません。麻酔のせいだけでもないでしょうが」

「3年がたった今、母はもっと生きたかったのかなと考えると、そうとも思えないのです。父がよく寿命って言いましたが、これが母にとっての寿命・お迎えだったと思えるのです」

「残念なのは、最後の日々、甘いものに目がなかった母が、おいしいものを口から食べられなかったこと、大好きなお

しゃべりができなかったこと。私は、母の表情から苦痛を読み取り、ほおずりしてぬくもりを感じ、言葉にならない会話を楽しみました」

「母は病院が大好きで、24時間看護師がいないと安心しない人でしたから、ホームで看護師がいつも見守ってくれて、幸せだったかもしれません。病院が大好きな人は病院にいると安心するし、病院が苦手な家はいい人もいます。その人の思いがつかると“安心の最期”になるのでは、と思います」

何年たっても遺族には複雑な思いが残る、意味づけを探します。思いがけない経緯での旅立ちにこそ、本人と家族への丁寧な看取りケアやグリーフケアが大切ではないでしょうか。



写真：人生の終わりの日々の光景
夫の葬儀の後で帰宅したときのさきよさん。娘が撮ったこの写真をとても喜び「これを遺影にしてね」。母娘の約束が守れました。